

Title	世阿弥「当麻」と中将姫伝説
Author(s)	尾上, 新太郎
Citation	大阪外国語大学学報. 71(1-3) p.131-p.139
Issue Date	1986-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81096
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

世阿弥「当麻」と中将姫伝説

尾 上 新太郎

Taema (Noh play by Zeami) and the Legend of Chūjō-hime

Shintaro Ogami

Hideo Kobayashi's essay on 'Taema (Noh play)' is very famous one in the modern literature in Japan.

'Taema (Noh play)' is derived from the legend of Chūjō-hime that is a story told of Taima Maṇḍala tapestry.

There is Taima Maṇḍala tapestry in Hon-dō (Mandala-do) in Taima-ji (Nara prefecture). At large, in Buddhism, it was said that women could not go to heaven as women.

There were many temples which were closed to women in old Japan. But 'Taema' praised women.

I discussed about these matters.

1

小林秀雄の評論「当麻」は、言う迄もなく世阿弥作と伝えられる能の「当麻」の観劇体験を題材に取ったものである。その能の「当麻」は、これ亦周知の事だが、奈良県北葛城郡当麻町にある当麻寺に纏わる中将姫伝説を題材に取ったものである。

中将姫伝説は、鎌倉時代になってから作られ始めたものである。概略そう言っている。尤も、原始的なそれは平安時代すでに作られていたと言える。これらの事を考えさせるのは、当麻寺縁起や当麻曼荼羅縁起に関する文献上最も古い資料であるところの実叡『建久御巡礼記』（1192年）である。以下これを素材にして考察を進めて見よう。猶引用は、京大附属図書館所蔵本（文学部閲覧室在、1942年7月古粹堂文庫本により書写、書名、南都七大寺縁起）による（異字体は通行のものに改めた）。

当麻寺

乗濁ノ時ニ当麻寺ニツカセオハシマス此寺法名禪林寺橋、豊日天皇之皇子麻呂子、親王、御願也
金堂_{ニハ}奉_{レリ}居_エ弥勒_ヲ当麻寺_ト云_フ付_{ケタル}事_ハ天武天皇依_{リテ}大友皇子_ヲ乱_ニ出_テ吉野_ノ宮_ヲ逃_ケ去_ル美
野国。野上不破宮給時。彼宮侍従三位当麻国見真人捨命立_テ忠節_ヲ捧_テ大友皇子_ノ首_ヲ献_{ツリキ}天皇_ニ、依_リ其功勲_ニ、叙官位_ニ、遷_{ラセ}大和国清御原郡_ニ給_テ後、白鳳九年辛巳二月十五日遷造_{リシ}也此_ノ所_ハ
役優婆塞_ノ所_{ニテ}彼本尊一搦手半孔雀明王オハシマシケルヲ此弥勒御身_ニ奉_レ龍、也又不動尊

抑極楽、変相、感仏事

有縁起云 麻呂子親王并同夫人善心凝一信力無二請吉土於此処立精舎於其中金堂者弥勒三尊
満月之光明旁彰西堂者極楽九品宝樹之変相織成爰夫人常願云、我如何移浄土於斯砌、集衆生於斯
庭可為往生之縁者然間去天平宝字七年六月廿三日夜有化人以蓮糸織変相化人与夫人与夜中暗頭
畢不知移一仏土於斯土歟又不知送九品基於斯庭歟未曾有之心深不思議之念入骨云、

此縁起時代年号尤不合歟

彼寺僧_ノ申_{サゲ}織_ツ仏_ノ事_ハ無_シ慥_カ日記、但_レ此曼荼羅_{シモヘリ}下_ノ縁不壊_ヤ之時_キ。天平宝寺七年_ト云_フ年号
慥_ニ被織付_{タリキ}其_ノ比_ヲヨコハキノ大納言_ト云_フ人有_{ケリ}彼_ノ御娘朝夕極楽_{ムスメツケクレ}願_{ネガ}曼荼羅_ヲウツサハ
ヤト願_チ起_{サレケリ}年来_{トシコロナカ}乍_{オモ}思_{スク}過_{アヒタ}間_ニ一_ノ化人来_{リテ}一夜_ヲ間織_{リテ}行方_ヲ不知_ト、申_{サゲ}此_ノ大納言御娘一生
間向_{ヒテ}此_ノ仏_ニ、タユマス行_{ヒテ}極楽_ニ生_{ニケリ}ト申_{サゲ}伝_{タリ}此_ノ仏_ノ上_{ニハ}軸_ヲフシナキ竹_ヲ一丈余_{ナルヲ}モチキ
ル

まず当麻寺について少しくも言及しておこう。右「当麻寺」の記事に従うなら、当麻寺は正式名
を禪林寺と言い、麻呂子親王の御願寺である。そしてその最初の建立地は今の場所とは相違し、壬
申の乱の功臣当麻国見が天武天皇の9年(681年)2月15日今の場所に遷造したものである。又当麻
寺の地は、もと役小角の領地だった。(金堂の)弥勒座像の内部にその役小角の本尊孔雀明王像が籠め
られている。右「当麻寺」の記事の伝えるところである。少しその内容に批判を加えて見よう。麻
呂子親王については、『日本書紀』用明天皇項に、

かづらきのあたひいはむら　むすめひろこ　ひとり　ひこみこひとり　ひめみこ
葛城直磐村が女広子、一の男・一の女を生めり。男をば麻呂子皇子と曰す。此当麻公の先
なり、

と見える。問題がある。「麻呂子は貴人の子弟を呼ぶ普通名詞」(大系本頭注)である。系譜にその
名が普通名詞の形で示されるのは特殊なケースという、そしてその場合、母方の身分の低さ、夭逝
等がその理由に考えられるとされる(岩城隆利「当麻寺　その1縁起を中心として」、『元興寺仏教
民俗資料研究所年報』第5冊、1972年3月、同研究所発行)。しかしこの皇子の場合は該当しない。
「麻呂子親王」は、推古天皇の11年(603年)4月、征新羅將軍に任命された当麻皇子の事とされる
が、この皇子は、難波より発船、播摩に上陸、しかし「赤石」で妻「舎人姫王」の死に会い、引

き返した（『書紀』推古天皇項11年7月）。かくして「遂に征討^うつことをせず」とある。この点が系譜上普通名詞で示されるに至った事情に関係しているかもしれないと岩城はしている。何にしろ、麻呂子親王は、後世のその流れをくむ当麻氏からすれば、自分等の誇りであった。即ち皇族という点で。さらには、かの日本における仏教興隆の大恩人・聖徳太子の（異母）弟であるという点で。

ところで、件んの記事によると、当麻寺には前身の寺があった風である。それを白鳳時代の天武9年2月15日、当麻国見が遷造したという。しかし前身の寺の名称とか又その場所については何もふれられていない。『当麻寺流記』（1231年）には、前身の寺が「万法蔵院」として出る。前身寺名が出るのはこれが嚆矢である。但し、その場所は示していない。『上宮太子拾遺記』（第3、「当麻寺建立事」、1237年）において初めてその場所等が示される。即ち、

件伽藍者。今寺南五六町有之。旧礎存今。此云₂味曾路₁²⁾。

「味曾路」について考察して見よう。今日当麻町の土地台帳にも出ない地名である。南河内郡東部教育会編『郷土史の研究』（1926年）に、

竹之内峠

此峠を一名味曾路越或はみそげ越ともいふ、

とある。即ち、かの地の竹内峠を越える所謂竹内街道の道を「味噌路」又「みそげ」と呼称した事がうかがわれる。林宗甫『和州旧跡幽考』（巻8、1681年）中にも「味曾越」なる名称が出る。それは当麻寺の説明文中出るので、当麻寺はもと河内国山田郷にあったと言い、万法蔵院と称したがその場所は、「今の味曾^{ミソ}越^{コシ}なり³⁾」とある。当麻寺の前身寺が河内国山田郷にあったとする説は、『私聚百因縁集』（巻第7「当麻曼陀羅事」、1257年）から出る。『和州旧跡幽考』が言っている万法蔵院の地は、二上山の西側、南河内郡太子町山田の地を指す（周知の事だが、河内国山田郷を交野郡の山田郷とする説もある）。「味噌路」についてだが、中山忠親『山槐記』治承4年（1180年）12月28日の条に見える、

官兵自河内国越未曾地之間為衆徒被攻却死者甚多⁴⁾

の記事中の「未曾地」も亦竹内峠越えの道、即ちその地の竹内街道を指すものと思われ、概して、「味噌路」は、その事とされるのである。『郷土史の研究』によって言うなら、「味噌路」は、ミソジと読む。

西督聖聡『当麻曼陀羅疏』（巻第46、1436年）中、

去治承年中₂平家₁大将三位中将重衡_{7,2}賜₂前手₁大将₁発₂向南都₁同時搦手大将越中次郎兵衛
守次自₂河内国₁懸₂御衣路₁発₂向南都₁⁵⁾

とある記事中にも、「御衣路」が見える。これからすると『上宮太子拾遺記』中の「味曾路」は、二上山南側を通る竹内峠越えの道、即ち竹内街道を指すものとされるが、唯しかし同記の文面では、「味曾路」は、道ならぬ地点の意に解される。無論、両者が無縁とは考えられぬが。この点当麻町竹内在の伊瀬孝太郎氏（1894年のお生れ）よりの御教示があるので附す。氏によれば、ミソジとは、当麻寺とその南方の竹内街道の間の互堂池の上部谷会いの地辺りを言うという。氏は又その近くに「ミロクの芝」「ミロク谷」という古地名のある事も示された（拙稿「当麻道考」、『表象』第5号、1983年10月、表象編集委員会発行、参照）。氏の示されるミソジは、『上宮太子拾遺記』に言う「味曾路」にその位置がほぼ該当している。

さて、言う迄もなく、『建久御巡礼記』には、前身の寺の名称とかその場所についての記述等はない。後世その名称が出、又別の記録でその場所が明示されるという按配で、そこには後人の創作が入り込んでいるとまずされる。先の岩城論文は、これらの事からして、前身の寺の存在を疑問視している。そうなると、当麻寺麻呂子親王御願寺説それ自体もおかしいという事になる。座談会「当麻寺をめぐる」（『仏教芸術』45号、毎日新聞社、1961年1月）中、植木孝四郎も、当麻寺麻呂子親王創建説は、当麻氏が後から創作した伝説ではないかとしている。傾聴に値しよう。簡明に言えば、当麻寺は、白鳳時代一壬申の乱（672年）以降、一当麻国見といった氏の有力者の手によってその氏寺として最初から今の地に建立されたという事である。白鳳時代創建説については、その遺物・遺品から、今日定説化している。尤も、東西の塔の建立時代が奈良平安にまたがったりして、相当長年月かけて最終的な完成を見たものであるらしい⁶⁾。

『建久御巡礼記』中の当麻寺縁起でもう一つ問題になるのは、役行者（役小角）が出る点で、当時（平安時代末頃）の修験道の興盛がうかがわれるのでもある。当時周知の通り、当麻寺は、真言宗の寺であった。その辺の事をからめて考察すべきであろうが今は全て役行者関係については立ち入らない事にする。

2

さて、『建久御巡礼記』中の当麻曼荼羅関係の記事に移ろう。同記によると、当麻曼荼羅縁起として二説が当時あった事になる。一つの説は、比類なく信仰心の篤かった麻呂子親王夫人の本願によって化人が蓮糸を以て曼荼羅を織ったというもので、「化人与夫人与夜中暗顯畢」とあるところからすると、夫人も手伝ったという事だろう。「不知移一仏土於斯土歟又不知送九品基於斯庭」（一仏土をこの土に移すを知らざるか又、九品の基をこの庭に送るを知らざるか）ともあるが、こういった話は、『観無量寿経』の韋提希物語を想起さすものである。但し、『建久御巡礼記』の著者実叡は、「此縁起時代年号尤不合歟」としている。麻呂子親王並びに同夫人は、6世紀後半から7世紀にかけての人

とまず考えられる。天平宝字7年は、奈良時代の後期、西暦で言えば763年である。やはり疑問の湧くところである。

さて、今一つ当麻曼荼羅に関する記事がある。中将姫の考察という点では無論この方に着目すべきである。当麻寺の寺僧の話として乗せてあるのだが、天平宝字7年頃、「ヨコハキノ大納言」という人があった。その人に娘があつて彼女は朝夕浄土を欣求してその有様を写そうと年来願を立てていた。ある時一人の化人が現われ、一夜の内に曼荼羅を織った。一生この娘は曼荼羅に向ひ念仏三昧の生活を送り結果極楽往生をとげた。

概略こういうもので、謡曲「当麻」に見られる中将姫伝説の骨格がすでにほぼ見えている。無論、「ヨコハキノ大納言」の実名とか中将姫というヒロイン名等は未だ出ていない。謡曲「当麻」には、「ヨコハキノ大納言」は、「横佩^{ヨコハギ}の右大臣豊成^{トヨナリ}」として出る訳だが、その（藤原）豊成という史実上の人物名が最初に出るのは、『和州当麻寺極楽曼陀羅縁起』（1262年）である。因みに、『上宮太子拾遺記』では、「大納言横佩卿」、『当麻寺流記』では、「横佩^{マサムネ}右大臣尹統」である。ヒロイン名について言えば、確実な資料上は、13世紀末迄待つべきともされるのだが、しかし私は、『流記』の記載をそのまま信じ、13世紀前半迄それを遡及させてよいものと考え。補注）

さて、我々が中将姫伝説の原話とする『建久御巡礼記』中の件んの記事は、女人往生譚である。（当麻）曼荼羅説教の一環として中将姫伝説は作られていった（五来重『絵巻物と民俗』中「中将姫と雲雀山」、角川選書、1981年9月）ものだが、その場合当然「当麻曼荼羅」（観経浄土変）の向って左辺に描かれている善導『観経四帖疏』言うところの「序義分」に当る韋提希物語が念頭におかれたであろう。当麻曼荼羅の本願者が麻呂子親王夫人と言われたり、又「ヨコハキノ大納言」の娘とされたりするのは、女性が実際の本願者であった事をうかがわせるもので無論ある。中将姫伝説はそういう女性本願者の史実をふまえているとその点では考えられる訳でもある。一方、『観無量寿経』の伝える韋提希夫人の物語も当然に伝説形成に基底しているものとされるものである（阿部泰郎「中将姫物語の成立—中将姫説話と中世文学」、『中将姫説話の調査研究報告書』中、元興寺文化財研究所、1983年3月、参照）。

韋提希物語とは概略以下のようなものである。王舎大城に阿闍世という太子がいた。調達という悪友に唆され父王頻婆娑羅を幽閉した。国の大夫人を韋提希と言ったが、彼女は密に夫国王に食物を運ぶ。その事を知り、阿闍世は母韋提希を幽閉してしまう。幽閉された韋提希は、愁憂、憔悴、遙かに耆闍崛山に向ひ釈迦に祈る。浄土を欣求する。釈迦はそれを見せる。次いで韋提希は、衆生の為に阿弥陀の浄土を釈迦の死後にあっても見うる方法の教えを乞う。以下16観法が示される訳だが周知の通り善導は最後の3観を分立した。当麻曼荼羅では、13観を向って右辺に、最後の3観を上品上生以下下品下生迄の9通りの往生の有様として下辺部に描いている。これらの事からして、当麻曼荼羅は、観経浄土変相図であるが、詳しくは、善導の解釈によった観経浄土変相図とされるものである。

さて、韋提希物語だが、これは元祖女人往生物語である。平安時代女人往生譚が多く集められた。

この事に関し、笠原一男は、日本では古代多くの女人往生に関する伝記が往生伝として編まれたが、女人往生論はなかったとしている(『女人往生思想の系譜』, 吉川弘文館, 1975年9月)。鎌倉時代は逆に女人往生の伝記の時代ならぬ女人往生論の時代という。

『大無量寿経』第35願は女人往生の願とされるものだが、しかし、すでに同経第18願に、

設我得仏、十方衆生、至心信樂、
欲生我国、乃至十念、若不生者、
不取正覚。唯除五逆誹謗正法⁹⁾。

(たとい、われ仏となるをえんとき、十方の衆生、至心に信樂して、わが国に生れんと欲して、乃至十念せん。もし、生れずんば、正覚を取らじ。ただ、五逆(の罪を犯すもの)と正法を誹謗するものを除かん。)

かくあり、「十方の衆生」の内に女性も当然入るはずだ。それなら、あえて女人往生の願が立てられたのはどういう訳か。この点法然『無量寿経釈』はこう答えている。

つらつらこの事を案ずるに、女人は障り重くして、明らかに女人に約せずは、即ち疑心を生ぜむ。そのゆゑは、女人は過^{とが}多く障り深くして、一切の処に嫌はれたり⁹⁾。

又、端的に、「内に五障あり、外に三従あり」ともしている。これらの問題については笠原前掲書が詳しい。浄土教は女性の救済を主題的に問題にしたが、笠原によれば、変成男子ならぬ女人のままの往生論が出るのは、蓮如に至っての事であるという。即ち、法然にも親鸞にも一遍にも女性に対する一種の差別意識がついて回った。女性五障説の発生は、紀元前1世紀の事という(梶山雄一『空の思想仏教における言葉と沈黙』中「仏教の女性観」, 人文書院, 1983年6月)。中国や日本では古来女性三従説が説かれた事は周知の事だが、しかし釈迦の時代においても、悟りに関して男女の間の差別があるとはされていなかったようである。差別があると言うのなら、特に大乘仏教においては端的に難問が出よう。私は梶山等に学んで言うのだが、もしそう言うのなら空思想上直接に矛盾が出る事になるだろう。我々は、女性を讃美した經典として『維摩経』や『勝鬘経』を知っている。今『維摩経』に着目して見よう。その前に、謡曲「当麻」にも女人五障の思想が出ている事に注意しておこう。又「当麻」は、深く、浄土教の中でも、一遍の思想の影響を受けているものだ。例えば、次の歌が出る。

称ふれば。仏もわれもなかりけり
南無阿弥陀仏の声ばかり

これは『一遍上人語録』中に収められている歌である。次の様な詞書と共に出る。尤も下句少々相違する。

宝満寺にて、由良の法燈国師に参禅し給ひけるに、国師、念起即覺の話を拏せられければ、上人かく読て呈したまひける
 となふれば仏もわれもなかりけり
 南無阿弥陀仏の声ばかりして¹⁰⁾

ところが、「国師、此歌を聞て、『未徹在』」と言ったと言う。引用を続けて見よう。
 それを聞いて一遍は以下のように読み替えた。すると、「国師、手巾・薬籠を附属して、印可の信を表したまふとなん」とある。歌を見てみよう。

となふれば仏もわれもなかりけり
 南無阿弥陀仏なむあみだ仏

念仏それ自身の世界が問題とされている。以下の一遍の言葉もある。

念仏の行者は知恵をも愚痴をも捨^{すて}、善惡の境界をもすて、貴賤高下の道理をもすて、地獄をおそるゝ心をもすて、極樂を願ふ心をもすて、又諸宗の悟をもすて、一切の事をすて^{もうす}申念仏こそ、弥陀超世の本願に尤かなひ候へ¹¹⁾。

こういう一遍の言葉と『維摩経』の中の天女の舍利仏に対する言説との間に同一性を見出したのは、紀野一義である（『維摩経』仏教講座9、大蔵出版、1971年8月）。紀野が問題にする天女の言葉とは、

われ得ることも無く、証ることも無し。故に弁ずること、かくの如し（紀野同書187頁より引用）。

この一寸前にこんな天女の言葉がある。

言説文字こそ皆解脱の相なれ。ゆえはいかにというに、解脱は内ならず、外ならず、両間に在らず。文字もまた内ならず、外ならず、両間に在らず。この故に舍利弗、文字を離れて解脱を説くこと無きなり。ゆえいかんとならば、一切の諸法はこれ解脱の相なればなり（引用、右同書186頁）。

問題は、どういう位相からこういう発言がなされているかという事であり、その点の答えが、「われ得ることも無く、証ることも無し」なのだ。そういうところに紀野は一遍の念仏の世界との共通性を見い出すのである(件んの一遍の二首又それに付随する話も紀野は出している)。無論天女にしろ一遍にしろどういう局面でそれが言われるかが問題で基底に大乘仏教の空論が働いているとされる。この点明確に梶山雄一は『維摩経』の女性像に深い思想性を認め、又それは、大乘仏教に基底している空の思想に直結しているとしている(前出「仏教の女性観」中)。所謂変成男子という形で女人往生はここでは問題にならない。因みに、『大無量寿経』第35願とは以下のようなものである。

設我得仏、十方無量不可思議諸仏世界、其有女人、聞我名字、歡喜信樂、發菩提心、厭惡女身。壽終之後、復為女像者、不取正覺。

(たとい、われ仏となるをえんとき、十方の無量・不可思議の諸仏世界に、それ、女人ありて、わが名字を聞きて、歡喜信樂し、菩提心を發し、女身を厭惡せん。(その人) 壽終りてのち、また女像とならば、正覺を取らじ。)

そこには、女性を否定的に見る視点がとまれ認められる。この問題はむずかしい。一般的に言えば、仏教はこれらからして、フェミニズムに非ずという事になるが、しかし又そう事は単純でないとされる側面もある。詭弁とも受けとれるが、金子大栄は、『観無量寿経講話』(コマ文庫、1984年2月)中、女性と女子とを分け、男子の内にも女性があるとしている。その上で、人間の救済としての女性の救済という事を考え、浄土教の内にその点を大きく認める。このように考える金子は、又女性(女人)こそが浄土教を興すと説く。浄土を欣ぶ根機というものを慮つての見解なのだが、謡曲「当麻」をこの線で見て見よう。

「世阿弥はフェミニスト」という意見がある(生島遼一、座談会「『当麻』をめぐる」中、『観世』1972年6月号、檜書店)。つまりもう少し積極的に女性を肯定すべきなのだ。少なくとも謡曲「当麻」においては。

小林秀雄「当麻」中、中将姫の貴やかな舞い姿の形容として、

歴史の泥中から咲き出でた花¹²⁾

という言葉が出る。これは、『維摩経』に出典をもつ言葉であろう。即ち、第7章に、

もし無為を見て正位に入る者は、また阿耨多羅三藐三菩提心を發す能わず。譬えば、高原の陸地には蓮華を生ぜず、卑湿の淤泥に、すなわちこの華を生ずるが如し、かくの如く、無為法を見て正位に入る者は、ついにまたよく仏法を生ぜず、煩惱の泥中にすなわち衆生ありて、

よく仏法を起こすのみ（引用、紀野前掲書、222頁）。

中将姫の貴やかな舞い姿、一彼女は、白蓮の天冠を戴いている。白蓮は女性の悟りのシンボルという（籠谷真智子、前出『観世』座談会中）。謡曲「当麻」の中でも、女性五障説は越えられていないと言えるがしかし籠谷も言うように、男女によらぬ念仏即往生論がそこでは美しく又説かれる。その美しさの表現において現われて来るものは、つまりは女性というものである。金子は欣求浄土の機根を女性にもつものとした。女性においてこそ浄土興法があるとも。その場合、女性は現実的に言って、否定視されていると言える。しかし一方、それを言うのなら、女性は本来尊いとするべきでもあるだろう。もしそうでなかったならば、機縁自体が働きえぬだろう。

〔注〕

- 1) 引用、岩波大系本による、以下『日本書紀』に関しては同様。
- 2) 引用、大日本仏教全書148による。
- 3) 引用、大阪府立図書館・石崎文庫本による。
- 4) 引用、大阪府立図書館・石崎文庫本による。
- 5) 引用、浄土宗全書13による。
- 6) 岡田英男「当麻寺の歴史と美術」（『大和古寺大観 第2巻当麻寺』、岩波書店、1978年12月）参照。
- 7) 謡曲「当麻」の引用は、1932年7月、檜書店発行のものによる、以下も謡曲「当麻」に関しては同様。
- 8) 引用、岩波文庫『浄土三部経上』による、訓み下し文も右による、以下『浄土三部経』に関しては同様。
- 9) 引用、岩波、日本思想大系『法然 一遍』による。
- 10) 引用注9参照。
- 11) 注9参照。
- 12) 引用、新潮社『新訂小林秀雄全集第8巻』による。

補注)「尹統」の右下方に「字中将」とあるのだが（宮内庁書陵部蔵）、後人の補入という説がある。しかし、前後の墨の濃淡の具合、又仮に後から補入せられたものとした場合その部分に生じる空白の不自然さ、又その字体等からして、頭初から書かれていたものとする方が自然である。

（引用の全てに渡って漢字の字体、振り仮名他適宜勘案したところがある。）